

I am a Cat – Chapter 2b (Natsume Sōseki)

とうふうし かえ しゅじん しょさい い つくえ うえ み ま めいていせんせい てがみ
東風子が帰ってから、主人が書斎に入って机の上を見ると、いつの間に迷亭先生の手紙が
き
来ている。

しんねん ぎょけいめでたくもうしおさめそろ
「新年の御慶目出度申納候。……」

いつになくでまじめだと主人がおも。迷亭先生の手紙に真面目なのはほとんどないので、こ
のあいだ 間は「其後別に恋着せる婦人も無之、いずかた えんしょ まい まま ぶじ
しょうこうまか あ そろあいだ はばかりながらごきゅうしんくださるべくそろ い
消光罷り在り候間、乍憚御休心可被下候と云うのが来たくらいである。それに較べ
るとこの年始状は例外にも世間的である。

いっすんさんどうつかまつ たくそろ たいけい しょうきよくしゅぎ はん で きう かぎ せつきよくてき
「一寸参堂仕り度候えども、大兄の消極主義に反して、出来得る限り積極的
ほうしん もつ このせんこみぞう むか けいかくゆえ まいにちまいにちめ まわ ほど たぼう ごすいさつ
方針を以て、此千古未曾有の新年を迎える計画故、毎日毎日目の廻る程の多忙、御推察
ねがいあげそろ
願上候……」

なるほどあの おとこ こと しょうがつ あそ まわ いそ ちが はら なか
なるほどあの男の事だから正月は遊び廻るのに忙がしいに違いないと、主人は腹の中で
くん どうい
迷亭君に同意する。

さくじつ いっごく ぬす ぐちそう いた ぞん そろところ あいにく
「昨日は一刻のひまを偷み、東風子にトチメンゴ一の御馳走を致さんと存じ候処、生憎
ざいりょうふつてい た そのい はた いかんせんばん ぞんじそろ
材料拵底の為め其意を果さず、遺憾千万に存候。……」

れい とお むごん びしょう
そろそろ例の通りになって来たと主人は無言で微笑する。

みょうにち ぼうだんしゃく かる たかい みょうごにち しんびがくきょうかい えんかい とりべきょうじゅ
「明日は某男爵の歌留多会、明後日は審美学協会の新宴会、其明日は鳥部教授
かんげいかい また
歓迎会、其又明日は……」

よ
うるさいなど、主人は読みとばす。

みぎ ごと ようきよく はいく たんか しんたいし とう れんばつ とうぶん あいだ
「右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等、会の連発にて当分の間は、のべつ
まくな しゅつきんいた そろ やむをえずがじょう はいすう れい か そろだんあしからずごゆうじょ
幕無しに出勤致し候為め、不得已賀状を以て拝趨の礼に易え候段不悪御宥恕
くだされたくそろ
被下度候。……」

べつだん およ へんじ
別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をする。

こんどごこうらい せつ ひさ ぶ ばんさん きょう たきこころえ ござそろ かんちゅうなん ちんみ
「今度御光来の節は久し振りにて晩餐でも 供し度心得に御座候。寒厨何の珍味も
これなくそうら たいま ころがけおりそろ
無之候えども、せめてはトチメンバーでもと只今より心掛居候。……」

ふ まわ しっけい しゅじん
まだトチメンバーを振り廻している。失敬など主人はちよつとむつとする。

しか ちかごろざいりょうふつてい た よ ま あ かねそろ はか
「然しトチメンバーは近頃材料払底の為め、ことに依ると間に合い兼候も計りがたきに
その くじゃく した ごふうみ い もうすべくそろ
つき、其節は孔雀の舌でも御風味に入れ可申候れ。……」

りょうてんびん よ
両天秤をかけたなど主人は、あとが読みたくなる。

ごしょうち とお いちわ したにく ぶんりょう こゆび なか た ほどゆえけんたん たいけい
「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指の半ばにも足らぬ程故健啖なる大兄
いぶくろ み ため
の胃囊を充たす為には……」

う や
うそをつけと主人は打ち遣ったようにいう。

ぜひとともにさんじゅっぱ ほかくいた べか ぞんじそろ しか ところ どうぶつえん あさくさ
「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さざる可らずと存候。然る所孔雀は動物園、浅草
はなやしきとう み う そろ ふうふう とりやなど いっこうみあた もうさず くしんこのこと
花屋敷等には、ちらほら見受け候えども、普通の鳥屋杯には一向見当り不申、苦心此事に
御座候。……」

ひと かって ごう かんしゃ い ひょう
独りで勝手に苦心しているのじゃないかと主人は毫も感謝の意を表しない。

りょうり おうせきローマぜんせい みぎ いっときひじょう りゅうこういた そろ ごうしゃ
「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌、一時非常に流行致し候ものにて、豪奢
ふうりゅう きよくど へいぜい しよくし うご おりそろしだいごりょうさつくだきるべくそろ
風流の極度と平生よりひそかに食指を動かし居候次第御諒察可被下候。……」

なに ばか れいたん
何が御諒察だ、馬鹿など主人はすこぶる冷淡である。

くだ じゅうろくななせいき ころまで ぜんおう つう えんせき か こうみ あいなり
「降って十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴席に欠くべからざる好味と相成
おりそろ はく じょうこう しょうたいいた そろ たし しょう
居候。レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待致し候節も慥か孔雀を使用
いた そろようきおくいたしそろ ゆうめい えが そろきょうえん ず お ひろ
致し候様記憶致候。有名なるレンブラントが画き候饗宴の図にも孔雀が尾を広げたる
ままたくじょう よこた お そろ
儘卓上に横わり居り候……」

くじゃく りょうりし たぼう ふへい
孔雀の料理史をかくくらいなら、そんなに多忙でもなさそうだと不平をこぼす。

ちかごろ ごと ごちそう た づつ しょうせい とお たいけい
「とにかく近頃の如く御馳走の食べ続けにては、さすがの小生も遠からぬうちに大兄の
いじゃく あいな ひつじょう
如く胃弱と相成るは必定……」

よけい なに ぼく ひょうじゅん す しゅじん
大兄のごとくは余計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても済むと主人はつぶやいた。

れきしか せつ ローマじん ひ に どさんど えんかい ひら そろよし ほうじょう
「歴史家の説によれば羅馬人は日に二度三度も宴会を開き候由。日に二度も三度も方丈
しよくせん つ そろ い か けんい ひと しょうかきのう ふちょう かも したが しぜん
の食饌に就き候えば如何なる健胃の人にも消化機能に不調を醸すべく、従って自然
は大兄の如く……」

しっけい
また大兄のごとくか、失敬な。

しか ぜいたく えいせい りょうりつ けんきゅう つく かれら ふそうとう たりょう じみ
「然るに贅沢と衛生とを両立せしめんと研究を尽したる彼等是不相当に多量の滋味を
むさぼ どうじ いちよう じょうたい ほち ひつじょう みと いち ひほう あんしゅついた そろ
食ると同時に胃腸を常態に保持するの必要を認め、ここに一の秘法を案出致し候
……」

きゅう ねっしん
はてねと主人は急に熱心になる。

しよくごかなら にゅうよくいたしそろ いっしゅ ほうほう よくぜん えんか ことごと
「彼等は食後必ず入浴致候。入浴後一種の方法によりて浴前に嚙下せるものを悉
おうと いない そうじいた そろ かくせい こう そう のちまたしよくたく あ までちんみ
く嘔吐し、胃内を掃除致し候。胃内廓清の功を奏したる後又食卓に就き、飽く迄珍味を
ふうこう ふうこう おわ ゆ い これ としゅついたしそろ こうぶつ むさ しだい
風好し、風好し了れば又湯に入りて之を吐出致候。かくの如くすれば好物は食ばり次第
むさぼ そろう ぼう ないぞう しよきかん しょうがい しょう いっきよりょうとく これら こと もうすべき
貪り候も毫も内臓の諸機関に障害を生ぜず、一挙兩得とは此等の事を可申か
ぐこういたしそろ
愚考致候……」

そうい うらや かお
なるほど一挙兩得に相違ない。主人は羨ましそうな顔をする。

にじゅっせいき こんにちこうつう ひんぱん ぞうか ぐんこくた じせいろ だいにねん
「廿世紀の今日交通の頻繁、宴会の増加は申す迄もなく、軍国多事征露の第二年とも
あいなりそろおりから ごじんせんしょうこく こくみん ぜひと もなら この じゅつ
相成候候折柄、吾人戦勝国の国民は、是非共羅馬人に倣って此入浴嘔吐の術を研究せ
ぎかい どうちゃくいた そろ じしんいたしそろ さ せつかく だいこくみん ちか
ざるべからざる機会に到着致し候事と自信致候。左もなくば切角の大国民も近き
しょうらい おい いびょうかんじゃ ひそ しんつうまか そろ
将来に於て悉く大兄の如く胃病患者と相成る事と窃かに心痛罷りあり候……」

また大兄のごとくか、癩に障る男だと主人が思う。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を明治の社会に応用致し候わば所謂禍を未萌に防ぐの功德にも相成り平素逸楽を擅に致し候御恩返も相立ち可申と存候……」

何だか妙だなと首を捻る。

「依て此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を渉獵致し居候えども未だに発見の端緒をも見出し得ざるは残念の至に存候。然し御存じの如く小生は一度思い立ち候事は成功するまでは決して中絶仕らざる性質に候えば嘔吐方を再興致し候も遠からぬうちと信じ居り候次第。右は発見次第御報道可仕候につき、左様御承知可被下候。就てはさきに申上候トチメンボー及び孔雀の舌の御馳走も可相成は右発見後に致したく、左すれば小生の都合は勿論、既に胃弱に悩み居らるる大兄の為にも御便宜かと存候草々不備」

何だとうとう担がれたのか、あまり書き方が真面目なものだからつい仕舞まで本気にして読んでいた。新年匆々こんな悪戯をやる迷亭はよっぽどひま人だなあと主人は笑いながら云った。

それから四五日は別段の事もなく過ぎ去った。白磁の水仙がだんだん凋んで、青軸の梅が瓶ながらだんだん開きかかるのを眺め暮らしてばかりいてもつまらんと、一両度三毛子を訪問して見たが逢われない。最初は留守だと思ったが、二回目には病気で寝ているという事が知れた。障子の中で例の御師匠さんと下女が話しをしているのを手水鉢の葉蘭の影に隠れて聞いているとこうであった。

「三毛は御飯をたべるかい」「いいえ今朝からまだ何にも食べません、あったかにして御火燵に寝かしておきました」何だか猫らしくない。まるで人間の取扱を受けている。

一方では自分の境遇と比べて見て羨ましくもあるが、一方では己が愛している猫がかくまで厚遇を受けていると思えば嬉しくもある。

「どうもこま困るね、御飯をたべないと、身体がからだ疲れるばかりだからね」「そうでございますと
も、私わたくしども共いちにちごぜんでさえ一日御膳をいただかないと、明くる日はとてもあ働ひけませんもの」

下女げじょは自分より猫の方が上ほう等じょうとうな動物であるような返事をする。実際この家では下女より猫
の方が大切たいせつかも知れない。

「御医者様へ連れて行ったのかい」「ええ、あの御医者おいしゃさまはよっぽどつ妙いでございますよ。私わたくし
が三毛をだいて診察場しんさつばへ行くと、風邪かぜでも引いたのひかって私の脈みやくをとろうとするんでしょ。
いえ病人びょうにんは私ではございません。これですって三毛を膝の上へ直したら、にやにや笑いなが
ら、猫の病びょうき気はわしにも分らん、抛わかっておいたら今いまに癒なおるだろうってんですもの、あんまり
苛ひどいじゃございませんか。腹はらが立たったから、それじゃ見ていただかなくってもようございます
これでも大事だいじの猫なんですって、三毛を懐ふところへ入れてさっさと帰かえって参まいりました」「ほんにね
え」

「ほんにねえ」は到底とうてい吾輩わがはいのうちなどで聞かれる言葉ことばではない。やはり天璋院様てんしょういんさまの何とか
の何とかでなくては使つかえない、はなはだ雅がであると感じかんしんした。

「何だかしくしく云うようだが……」「ええきつと風邪を引いて咽喉のどが痛いたむんでございま
すよ。風邪を引くと、どなたでも御咳おせきが出でますからね……」

天璋院様てんしょういんさまの何とかの何とかの下女げじょだけに馬鹿ば丁寧かていねい言葉ことばを使つかう。

「それに近頃ちかごろは肺病はいびょうとか云うものが出来てのう」「ほんとにこの頃のように肺病だのペスト
だのって新あたしい病びょうき気ばかり殖ふえた日にや油断ゆだんも隙すきもなりやしませんのでございますよ」
「旧幕時代きゅうばくじだいに無い者に碌なな者ものはないから御前おまえも気きをつけないといかんよ」「そうございま
しょうかねえ」

下女おおいは大かんどうに感動している。

「風邪を引くといってもあまり出であるきもしないようだったに……」「いえね、あなた、それ
が近頃わるは悪い友ともだち達が出来ましてね」

下女は国事の秘密でも語る時のように大得意である。

「悪い友達？」「ええあの表通りの教師の所にいる薄ぎたない雄猫でございますよ」「教師と云うのは、あの毎朝無作法な声を出す人かえ」「ええ顔を洗うたんびに鵝鳥が絞め殺されるような声を出す人でござんす」

鵝鳥が絞め殺されるような声はうまい形容である。吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽をやる時、楊枝で咽喉をつつ突いて妙な声を無遠慮に出す癖がある。機嫌の悪い時はやけにががああやる、機嫌のいい時は元気づいてなおがあがああやる。つまり機嫌のいい時も悪い時も休みなく勢よくがあがああやる。細君の話しではここへ引越す前まではこんな癖はなかったそうだが、ある時ふとやり出してから今日まで一日もやめた事がないという。ちょっと厄介な癖であるが、なぜこんな事を根気よく続けているのか吾等猫などには到底想像もつかん。それもまず善いとして「薄ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだとお耳を立ててあとを聞く。

「あんな声を出して何の呪いになるか知らん。御維新前は中間でも草履取りでも相応の作法は心得たもので、屋敷町などで、あんな顔の洗い方をするものは一人もおらなかつたよ」「そうでございますともねえ」

下女は無暗に感服しては、無暗にねえを使用する。

「あんな主人を持っている猫だから、どうせ野良猫さ、今度来たら少し叩いておやり」「叩いてやりますとも、三毛の病気になったのも全くあいつの御蔭に相違ございませんもの、きつと讐をとってやります」

飛んだ冤罪を蒙ったものだ。こいつは滅多に近か寄れないと三毛子にはとうとう逢わずに帰った。

帰って見ると主人は書齋の中で何か沈吟の体で筆を執っている。二絃琴の御師匠さんの所で聞いた評判を話したら、さぞ怒るだろうが、知らぬが仏とやらで、うんうん云いながら神聖な詩人になりすましている。

ところへ当分多忙で行かれないと云って、わざわざ年始状をよこした迷亭君が飄然とや
て来る。「何か新体詩でも作っているのかね。面白いのが出来たら見せたまえ」と云う。「う
ん、ちょっとうまい文章だと思ったから今翻訳して見ようと思ってね」と主人は重たそうに
口を開く。「文章？ 誰れの文章だい」「誰れのか分らんよ」「無名氏か、無名氏の作にも
随分善いのあるからなかなか馬鹿に出来ない。全体どこにあったのか」と問う。「第二
読本」と主人は落ちつきはらって答える。「第二読本？ 第二読本がどうしたんだ」「僕の翻
訳している名文と云うのは第二読本の中にあると云う事さ」「冗談じゃない。孔雀の舌の
響を際どいところで討とうと云う寸法なんだろう」「僕は君のような法螺吹きとは違うさ」
と口髯を捻る。泰然たるものだ。「昔しある人が山陽に、先生近頃名文はござらぬかとい
ったら、山陽が馬子の書いた借金の催促状を示して近來の名文はまずこれでしょうと云っ
たという話があるから、君の審美眼も存外たしかかも知れん。どれ読んで見給え、僕が批評し
てやるから」と迷亭先生は審美眼の本家のような事を云う。主人は禅坊主が大燈国師の遺誠を
読むような声を出して読み始める。「巨人、引力」「何だいその巨人引力と云うのは」「巨
人引力と云う題さ」「妙な題だな、僕には意味がわからんね」「引力と云う名を持っている
巨人というつもりさ」「少し無理なつもりだが表題だからまず負けておくとしよう。それか
ら早々本文を読むさ、君は声が善いからなかなか面白い」「雑ぜかえしてはいかんよ」と予
じめ念を押してまた読み始める。

ケートは窓から外面を眺める。小児が球を投げて遊んでいる。彼等は高く球を空中に
擲つ。球は上へ上へとものぼる。しばらくすると落ちて来る。彼等はまた球を高く擲つ。再
び三度。擲つたびに球は落ちてくる。なぜ落ちるのか、なぜ上へ上へとものぼらぬかとケ
ートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と母が答える。「彼は巨人引力である。彼は強
い。彼は万物を己れの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。引かねば飛んでしまう。小児
も飛んでしまう。葉が落ちるのを見たらう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落す事
があろう。巨人引力が来いというからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ。呼ぶと落ち
てくる」

「それぎりかい」「むむ、甘いじゃないか」「いやこれは恐れ入った。飛んだところでトチメ
ンボーの御返礼に預った」「御返礼でもなんでもないさ、実際うまいから訳して見たのさ、

君はそう思わなかね」と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚ろいたね。君にしてこの伎倆あらんとは、全く此度という今度は担がれたよ、降参降参」と一人で承知して一人で喋舌る。主人には一向通じない。「何も君を降参させる考へはないさ。ただ面白い文章だと思ったから訳して見たばかりさ」「いや実に面白い。そう来なくっちゃ本ものでない。凄いものだ。恐縮だ」「そんなに恐縮するにはおよばん。僕も近頃は水彩画をやめたから、その代りに文章でもやろうと思ってね」「どうして遠近無差別黒白平等の水彩画の比じゃない。感服の至りだよ」「そうほめてくれると僕も乗り気になる」と主人はあくまでも疝違いをしている。

ところへ寒月君が先日は失礼しましたと這入って来る。「いや失敬。今大変な名文を拝聴してトチメンバーの亡魂を退治られたところで」と迷亭先生は訳のわからぬ事をほのめかす。「はあ、そうですか」とこれも訳の分らぬ挨拶をする。主人だけは左のみ浮かれた気色もない。「先日は君の紹介で越智東風と云う人が来たよ」「ああ上りましたか、あの越智東風と云う男は至って正直な男ですが少し変っているところがあるので、あるいは御迷惑かと思いましたが、是非紹介してくれというものですから……」「別に迷惑の事もないがね……」「こちらへ上っても自分の姓名のことについて何か弁じて行きやしませんか」「いえ、そんな話もなかったようだ」「そうですか、どこへ行っても初対面の人には自分の名前の講釈をするのが癖でしてね」「どんな講釈をするんだい」と事あれかしと待ち構えた迷亭君は口を入れる。「あの東風と云うのを音で読まれると大変気にするので」「はてね」と迷亭先生は金唐皮の煙草入から煙草をつまみ出す。「私しの名は越智東風ではありません、越智東風ですと必ず断りますよ」「妙だね」と雲井を腹の底まで呑み込む。「それが全く文学熱から来たので、こちと読むと遠近と云う成語になる、のみならずその姓名が韻を踏んでいると云うのが得意なんです。それだから東風を音で読むと僕がせっかくの苦心を人が買ってくれないといって不平を云うのです」「こりやなるほど変ってる」と迷亭先生は図に乗って腹の底から雲井を鼻の孔まで吐き返す。途中で煙が戸迷いをして咽喉の出口へ引きかかる。先生は煙管を握ってごほんごほんといひ返す。「先日来た時は朗読会で船頭になって女学生に笑われたと云っていたよ」と主人は笑いながら云う。「うむそれぞれ」と迷亭先生が煙管で膝頭を叩く。吾輩は喉呑になったから少し傍を離れる。

「その朗読会さ。せんだってトチメンボーを御馳走した時にね。その話しが出たよ。何でも第二回には知名の文士を招待して大会をやるつもりだから、先生にも是非御臨席を願いたいて。それから僕が今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞くと、いえこの次はずっと新しい者を撰んで金色夜叉にしましたと云うから、君にや何の役が当たてるかと聞いたら私御宮ですといったのさ。東風の御宮は面白からう。僕は是非出席して喝采しようと思ってるよ」「面白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方をする。「しかしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところがないから好い。迷亭などとは大違いだ」と主人はアンドレア・デル・サルと孔雀の舌とトチメンボーの復讐を一度にとる。迷亭君は気にも留めない様子で「どうせ僕などは行徳の俎と云う格だからなあ」と笑う。「まずそんなところだろう」と主人が云う。実は行徳の俎と云う語を主人は解さないのであるが、さすが永年教師をして胡魔化しつけているものだから、こんな時には教場の経験を社交上にも応用するのである。「行徳の俎というのは何の事ですか」と寒月が真率に聞く。主人は床の方を見て「あの水仙は暮に僕が風呂の帰りがけに買って来て挿したのだが、よく持つじゃないか」と行徳の俎を無理にねじ伏せる。「暮といえば、去年の暮に僕は実に不思議な経験をしたよ」と迷亭が煙管を大神楽のごとく指の尖で廻らす。「どんな経験か、聞かし玉え」と主人は行徳の俎を遠く後に見捨てた気で、ほっと息をつく。迷亭先生の不思議な経験というのを聞くと左のごとくである。

「たしか暮の二十七日と記憶しているがね。例の東風から参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたいから御在宿を願うと云う先き触れがあったので、朝から心待ちに待っていると先生なかなか来ないやね。昼飯を食ってストーブの前でバリー・ペーンの滑稽物を読んでいるところへ静岡の母から手紙が来たから見ると、年寄だけにいつまでも僕を小供のように思ってるね。寒中では夜間外出をするなどか、冷水浴もいいがストーブを焚いて室を暖かにしてやらないと風邪を引くとかいろいろの注意があるのさ。なるほど親はありがたいものだ、他人ではとてもこうはいかないと、呑気な僕もその時だけは大に感動した。それにつけても、こんなにのらくらしては勿体ない。何か大著述でもして家名を揚げなくてはならん。母の生きているうちに天下をして明治の文壇に迷亭先生あるを知らしめたいと云う気になった。それからなお読んで行くと御前なんぞは実に仕合せ者だ。露西亜と戦争が始まって若い人達は大変な辛苦をして御国のために働らいているのに節季師走でもお正月のように

きらく あそ か
気楽に遊んでいると書いてある。――僕はこれでも母の思ってるように遊んじやいやね
――そのあとへ以て来て、僕の小学校時代の朋友で今度の戦争に出て死んだり負傷したも
のの名前が列举してあるのさ。その名前を一々読んだ時には何だか世の中が味気なくなって
人間もつまらないと云う気が起ったよ。一番仕舞にね。私しも取る年に候えば初春の
おぞうに いわ そろ かぎ
御雑煮を祝い候も今度限りかと……何だか心細い事が書いてあるんで、なおのこと気がくさ
くさしてしまって早く東風が来れば好いと思つたが、先生どうしても来ない。そのうちとうと
う晩飯になつたから、母へ返事でも書こうと思つてちよいと十二三行かいた。母の手紙は
ろくしゃくいじょう げい で き じゅうぎょうないがい ごめん
六尺以上もあるのだが僕にはとてもそんな芸は出来んから、いつでも十行内外で御免
こうむ き
蒙る事に極めてあるのさ。すると一日動かずにおつたものだから、胃の具合が妙で苦し
い。東風が来たら待たせておけと云う気になって、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給
え。いつになく富士見町の方へは足が向かないで土手三番町の方へ我れ知らず出てしまつ
た。ちょうどその晩は少し曇つて、から風が御濠の向うから吹き付ける、非常に寒い。
かぐらざか きしゃ な どてした とお す
神楽坂の方から汽車がヒューと鳴つて土手下を通り過ぎる。大変淋しい感じがする。暮、
せんし ろうすい むじょうじんそく やつ あたま なか か めぐ ひと くび くく
戦死、老衰、無常迅速などと云う奴が頭の中をぐるぐる馳け廻る。よく人が首を縊ると云
うがこんな時にふと誘われて死ぬ気になるのじゃないかと思ひ出す。ちよいと首を上げて土手
の上を見ると、いつの間にか例の松の真下に来ているのさ」

れい まつ なん しゅじん だんく な い
「例の松た、何だい」と主人が断句を投げ入れる。

くびかけ めいてい えり ちぢ
「首懸の松さ」と迷亭は領を縮める。

こう だい かんげつ はもん
「首懸の松は鴻の台でしょう」寒月が波紋をひろげる。

かねかけ ど てさんばんちょう
「鴻の台のは鐘懸の松で、土手三番町のは首懸の松さ。なぜこう云う名が付いたかと云う
と、昔しからの言い伝えで誰でもこの松の下へ来ると首が縊りたくなる。土手の上に松は
なんじゅうぼん くびくく き み かなら さ
何十本となくあるが、そら首縊りだと来て見ると必ずこの松へぶら下がっている。年に
にさんべん ほか し き
二三返はきつとぶら下がっている。どうしても他の松では死ぬ気にならん。見ると、うまい
ぐあい えだ おうらい ほう よこ で い ぶ お
具合に枝が往来の方へ横に出ている。ああ好い枝振りだ。あのままにしておくのは惜しいも
のだ。どうかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か来ないかしらと、四辺を見渡すと

生憎誰も来ない。仕方がない、自分で下がろうか知らん。いやいや自分が下がっては命がない、危ないからよそう。しかし昔の希臘人は宴会の席で首縊りの真似をして余興を添えたと言う話しがある。一人が台の上へ登って縄の結び目へ首を入れる途端に他のものが台を蹴返す。首を入れた当人は台を引かれると同時に縄をゆるめて飛び下りるといふ趣向である。果してそれが事実なら別段恐るるにも及ばん、僕も一つ試みようと思つて枝へ手を懸けて見ると好い具合に撓る。撓り按排が実に美的である。首がかかつてふわふわするところを想像して見ると嬉しくてたまらん。是非やる事にしようと思つたが、もし東風が来て待っていると気の毒だと考え出した。それではまず東風に逢つて約束通り話しをして、それから出直そうと云う氣になつてついにうちへ歸つたのさ」

「それで市が榮えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにやにやしながら云う。

「うちへ歸つて見ると東風は来ていない。しかし今日は無抛処差支えがあつて出られぬ、いづれ永日御面晤を期すという端書があつたので、やつと安心して、これなら心置きなく首が縊れる嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見てすましている。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦れる。

「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐をひねくる。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がっている。たった一足違いでねえ君、残念な事をしたよ。考えると何でもその時は死神に取り着かれたんだね。ゲームスなどに云わせると副意識下の幽冥界と僕が存在している現実界が一種の因果法によつて互に感応したんだらう。実に不思議な事があるものじゃないか」迷亭はすまし返つている。

主人はまたやられたと思ひながら何も云わずに空也餅を頬張つて口をもごもご云わしている。

寒月は火鉢の灰を丁寧に掻き馴らして、俯向いてにやにや笑っていたが、やがて口を開く。
極めて静かな調子である。

「なるほど伺って見ると不思議な事でちょっと有りそうにも思われませんが、私などは自分でやはり似たような経験をつい近頃したものですから、少しも疑がう気になりません」

「おや君も首を縊りたくなつたのかい」

「いえ私のは首じゃないんで。これもちょうど明ければ昨年の暮の事でしかも先生と同日同刻くらいに起つた出来事ですからなおさら不思議に思われます」

「こりや面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「その日は向島の知人の家で忘年会兼合奏会がありまして、私もそれへヴァイオリンを携えて行きました。十五六人令嬢やら令夫人が集つてなかなか盛会で、近来の快事と思ふくらいに万事が整つていました。晚餐もすみ合奏もすんで四方の話しが出て時刻も大分遅くなつたから、もう暇乞いをして帰ろうかと思つていますと、某博士の夫人が私のそばへ来てあなたは〇〇子さんの御病気を御承知ですかと小声で聞きますので、実はその兩三日前に逢つた時は平常の通りどこも悪いようには見受けませんでしたから、私も驚ろいて精しく様子を聞いて見ますと、私しの逢つたその晩から急に発熱して、いろいろな譚語を絶間なく口走るようで、それだけなら宜いですがその譚語のうちに私の名が時々出て来るというのです」

主人は無論、迷亭先生も「御安くないね」などという月並は云わず、静粛に謹聴している。

「医者を呼んで見てもらつと、何だか病名はわからんが、何しろ熱が劇しいので脳を犯しているから、もし睡眠剤が思うように功を奏しないと危険であると云う診断だそうで私はそれを聞くや否や一種いやな感じが起つたのです。ちょうど夢でうなされる時のような重くらしい感じで周囲の空氣が急に固形体になつて四方から吾が身を締めつけるごとく思われまして。帰り道にもその事ばかりが頭の中にあつて苦しくてたまらない。あの奇麗な、あの快活なあの健康な〇〇子さんが……」

「ちょっと失敬だが待ってくれ給え。さっきから伺っているとお〇〇子さんと云うのが二返ばかり聞えるようだが、もし差支えがなければ承りたいたいね、君」と主人を顧みると、主人も「うむ」と生返事をする。

「いやそれだけは当人の迷惑になるかも知れませんから廃しましょう」

「すべて暖々然として昧々然たるかたで行くつもりかね」

「冷笑なさってははいけません、極真面目な話しなんですから……とにかくあの婦人が急にそんな病気になることを考えると、実に飛花落葉の感慨で胸が一杯になって、総身の活気が一度にストライキを起したように元気がにわかには減入ってしまいまして、ただ蹠々として踉々という形ちで吾妻橋へきかかったのです。欄干に倚って下を見ると満潮か干潮か分りませんが、黒い水がかたまっていた動いているように見えます。花川戸の方から人力車が一台馳けて来て橋の上を通りました。その提灯の火を見送っていると、だんだん小くなって札幌ビールの処で消えました。私はまた水を見る。すると遥かの川上の方で私の名を呼ぶ声が聞えるのです。はてな今時分人に呼ばれる訳はないが誰だろうと水の面をすかして見ましたが暗くて何にも分りません。気のせいに違いない早々帰ろうと思って一足二足あるき出すと、また微かな声で遠くから私の名を呼ぶのです。私はまた立ち留って耳を立てて聞きました。三度目に呼ばれた時には欄干に捕まっていながら膝頭ががくがく悸え出したのです。その声は遠くの方か、川の底から出るようですが紛れもない〇〇子の声なんでしょう。私は覚え「はい」と返事をしたのです。その返事が大きかったものですから静かな水に響いて、自分で自分の声に驚かされて、はっと周囲を見渡しました。人も犬も月も何にも見えません。その時に私はこの「夜」の中に巻き込まれて、あの声の出る所へ行きたいと云う気がむらむらと起ったのです。〇〇子の声がまた苦しうに、訴えるように、救を求めようように私の耳を刺し通したので、今度は「今直に行きます」と答えて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。どうも私を呼ぶ声が浪の下から無理に洩れて来るように思われましてね。この水の下だなど思いながら私はとうとう欄干の上に乗りましたよ。今度呼んだら飛び込もうと決心して流を見つめているとまた憐れな声が糸のように浮いて来る。ここだと思って力を込めて一反飛び上がっておいて、そして小石か何ぞのように未練なく落ちてしまいました」

「とうとう飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問う。

「そこまで行こうとは思わなかった」と迷亭が自分の鼻の頭をちょいとおつまむ。

「飛び込んだ後は気が遠くなって、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡れた所も何もない、水を飲んだような感じもしない。たしかに飛び込んだはずだが実に不思議なだ。こりや変だと気が付いてそこいらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところが、つい間違っって橋の真中へ飛び下りたので、その時は実に残念でした。前と後ろの間違っただけであの声の出る所へ行く事が出来なかったのです」寒月はにやにや笑いながら例のごとく羽織の紐を荷厄介にしている。

「ハハハハこれは面白い。僕の経験と善く似ているところが奇だ。やはりゼームス教授の材料になるね。人間の感応と云う題で写生文にしたらきっと文壇を驚かすよ。……そしてその〇〇子さんの病気はどうなったかね」と迷亭先生が追窮する。

「二三日前年始に行きましたら、門の内を下女と羽根を突いていましたから病気は全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の体であったが、この時ようやく口を開いて、「僕にもある」と負けぬ気を出す。

「あるって、何があるんだい」迷亭の眼中に主人などは無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は暗合で妙ですな」と寒月が笑う。欠けた前歯のうちに空也餅が着いている。

「やはり同日同刻じゃないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違うようだ。何でも二十日頃だよ。細君が御歳暮の代りに摂津大掾を聞かしてくれろと云うから、連れて行ってやらん事もないが今日の語り物は何だと聞いたら、細君が

新聞を参考して鰻谷だと云うのさ。鰻谷は嫌いだから今日はよそうとその日はやめにした。
翌日になると細君がまた新聞を持って来て今日は堀川だからいいでしょうと云う。堀川は
三味線もので賑やかなばかりで実がないからよそうと云うと、細君は不平な顔をして引き下が
った。その翌日になると細君が云うには今日は三十三間堂です、私は是非撰津の三十三間
堂が聞きたい。あなたは三十三間堂も御嫌いか知らないが、私に聞かせるのだからいっしょに
行って下さっても宜いでしょうと手詰の談判をする。御前がそんなに行きたいなら行っても宜
ろしい、しかし一世一代と云うので大変な大入だから到底突懸けに行ったらって這入れる気遣
いはない。元来ああ云う場所へ行くには茶屋と云うものが在ってそれと交渉して相当の席を
予約するのが正当の手続きだから、それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、
残念だが今日はやめようと云うと、細君は凄いい眼付をして、私は女ですからそんなむずかし
い手続きなんか知りませんが、大原のお母あさんも、鈴木の子代さんも正当の手続きを踏まな
いで立派に聞いて来たんですから、いくらあなたが教師だからって、そう手数のかかる見物を
しないでもすみましよう、あなたはあんまりだと泣くような声を出す。それじゃ駄目でもまあ
行く事にしよう。晩飯をくって電車で行こうと降参をすると、行くなら四時までに向うへ着
くようにしなくっちゃいけません、そんなぐずぐずしてはいられませんと急に勢がいい。
なぜ四時までに行かなくては駄目なんだと聞き返すと、そのくらい早く行って場所をとらなく
ちゃ這入れないからですと鈴木の子代さんから教えられた通りを述べる。それじゃ四時を過ぎ
ればもう駄目なんだねと念を押して見たら、ええ駄目ですともと答える。すると君不思議な事
にはその時から急に悪寒がし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はぴんぴんしていらあね。僕がさ。何だか穴の明いた風船玉のように一度に萎縮
する感じが起ると思うと、もう眼がぐらぐらして動けなくなった」

「急病だね」と迷亭が註釈を加える。

「ああ困った事になった。細君が年に一度の願だから是非叶えてやりたい。平生叱りつけ
たり、口を聞かなかつたり、身上の苦勞をさせたり、小供の世話をさせたりするばかりで

なにひと さいそうしんすい ろう むく きょう さいわ じかん のうちゅう しごまい とぶつ
何一つ洒掃薪水の労に酬いた事はない。今日は 幸い時間もある、 囊中には四五枚の堵物
もある。連れて行けば行かれる。細君も行きたいだろう、僕も連れて行ってやりたい。是非連
れて行ってやりたいがこう悪寒がして眼がくらんでは電車へ乗るどころか、靴脱へ降りる事も
出来ない。ああ気の毒だ気毒だと思ふとなお悪寒がしてなお眼がくらんでくる。早く医者
に見てもらって服薬でもしたら四時前には全快するだろうと、それから細君と相談をして甘木
医学士をむかひにやると生憎昨夜が当番でまだ大学から帰らない。二時頃には御帰りになりま
すから、帰り次第すぐ上げますと云う返事である。困ったなあ、今杏仁水でも飲めば四時前
にはきつと癒るに極っているんだが、運の悪い時には何事も思うように行かんもので、たま
さか妻君の喜ぶ笑顔を見て 楽もうと云う予算も、がらりと外れそうになって来る。細君は
恨めしい顔付をして、到底いらっしゃれませんかと聞く。行くよ 必ず行くよ。四時までには
きつと直って見せるから安心しているがいい。早く顔でも洗って着物でも着換えて待っている
がいい、と口では云ったようなものの胸中は無限の感慨である。悪寒はますます劇しくな
る、眼はいよいよぐらぐらする。もしや四時までに全快して約束を履行する事が出来なかつた
ら、気の狭い女の事だから何をするかも知れない。情けない仕儀になって来た。どうしたら
善かろう。万一の事を考えと今の内に有為轉變の理、生者必滅の道を説き聞か
して、もしもの変が起った時取り乱さないくらいの覚悟をさせるのも、夫の妻に対する義務で
はあるまいかと考へ出した。

ぼく すみや さいくん しょうさい よ おまえ おんな
僕は速かに細君を書斎へ呼んだよ。呼んで御前は女だけれども many a slip 'twixt the cup and
the lip と云う西洋の諺 くらいは心得ているだろうと聞くと、そんな横文字なんか誰が知る
もんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使って人にかからう
のだから、宜しゅうございます、どうせ英語なんかは出来ないんですから、そんなに英語が
御好きなら、なぜ耶蘇学校の卒業生かなんかをお貰いなさらなかったんです。あなたくらい
冷酷な人はありはしないと非常な権幕なんで、僕もせつかくの計画の腰を折られてしまっ
た。君等にも弁解するが僕の英語は決して悪意で使った訳じゃない。全く妻を愛する至情
から出たので、それを妻のように解釈されては僕も立つ瀬がない。それにさっきからの悪寒
と眩暈で少し脳が乱れていたところへもって来て、早く有為轉變、生者必滅の理を呑み
込ませようと少し急ぎ込んだものだから、つい細君の英語を知らないと云う事を忘れて、何の

き つ 気も付かずに使ってしまった訳さ。かんが 考 えるとこれは僕が悪るい、全く手落ちであった。この
しっぱい 失敗で悪寒はますます強くなる。眼はいよいよぐらぐらする。妻君は命ぜられた通り風呂場
へ行って両肌を脱いで御化粧をして、たんす きもの だ きが 箆笥から着物を出して着換える。もういつでも出掛けら
れますと云う風情で待ち構えている。僕は気が気でない。早くあまきくんが来てくれれば善いがと
おも 思 って時計を見るともう三時だ。よじ 四時にはもう一時間しかない。「そろそろ出掛けましよう
か」と妻君が書斎の開き戸を明けて顔を出す。自分の妻を褒めるのはおかしいようであるが、
僕はこの時ほど細君を美 しいと思った事はなかった。もろ肌を脱いで石鹸で磨き上げた皮膚
がぴかついて黒縮緬の羽織と反映している。その顔が石鹸と摂津大 掾を聞こうと云う希望と
の二つで、ふた ゆうけいむけい りょうほうめん かが 有形無形の両方面から輝やいて見える。どうしてもその希望を満足させて出掛
けてやろうと云う気になる。それじゃ奮発して行こうかな、と一ふくふかしているとようやく
せんせい 甘木先生が来た。

うまい ちゅうもんどお い 注 文 通りに行った。が容体をはなすと、あまきせんせい ぼく した なが て にぎ
胸を ぐね たた せ な せ な まぶち ひ く かえ ずがいこつ ずがいこつ かんが こ
敲いて背を撫でて、目縁を引っ繰り返して、頭蓋骨をさすって、しばらく考 え込んでい
る。「どうも少し陰呑のような気がしまして」と僕が云うと、先生は落ちついて、「いえ
かくべつ こと 格別の事もございますまい」と云う。「あのちょっとくらい外 出 致しても差支えはござい
ますまいね」と細君が聞く。「さよう」と先生はまた考え込む。「御気分さえ御悪くなければ
……」「気分は悪いですよ」と僕がいう。「じゃともかくも頓服 とんぷく すいやく あ
と水薬を上げますから」「へ
えどうか、なん 何だかちと、あぶ 危ないようになりそうですね」「いや決して御心配になるほどの事じ
ゃございません、しんけい おおこ 神経を御起しになるといけませんよ」と先生が帰る。三時は三十 分 過ぎ
た。げじょ くすりと 下女を薬取りにやる。げんれい か だ い か だ 下女を薬取りにやる。細君の厳命で馳け出して行って、馳け出して返ってくる。四時
じゅうごふんまえ 十五分前である。四時にはまだ十五分ある。すると四時十五分前頃から、今まで何とも無か
ったのに、きゅう はきけ もよ き 急に嘔気を催おして来た。細君は水薬を茶碗 ちゃわん つ
へ注いで僕の前へ置いてくれたか
ら、茶碗を と あ の 取り上げて飲もうとすると、い なか 胃の中からげーと云う者が げー とつ 唸
り出して出てくる。やむを
えず茶碗を した お 下へ置く。細君は「早く御飲みになったら宜いでしょう」と逼る。早く飲んで早く
で か 出掛けなくては義理が悪い。思い切 ぎり わる おも き って飲んでしまおうとまた茶碗を 唇 へつけるとまたゲー
が しゅうねんぶか ぼうがい 執念深く妨害をする。飲もうとしては茶碗を置き、飲もうとしては茶碗を置いていると茶
ま はしらどけい う 間の柱時計がチンチンチンチンと四時を打った。さあ四時だ ぐずぐず 愚図愚図してはおられんと茶碗

をまた取り上げると、不思議だねえ君、実に不思議とはこの事だろう、四時の音と共に吐き気がすっかり留まって水薬が何の苦なしに飲めたよ。それから四時十分頃になると、甘木先生の名医という事も始めて理解する事が出来たんだが、背中がぞくぞくするのも、眼がぐらぐらするのも夢のように消えて、当分立つ事も出来まいと思った病気がたちまち全快したのは嬉しかった」

「それから歌舞伎座へいっしょに行ったのかい」と迷亭が要領を得んと云う顔付をして聞く。

「行きたかったが四時を過ぎちゃ、這入れないと云う細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれたら僕の義理も立つし、妻も満足したろうに、わずか十五分の差でね、実に残念な事をした。考え出すとあぶないところだったと今でも思うのさ」

語り了った主人はようやく自分の義務をすましたような風をする。これで兩人に対して顔が立つと云う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた歯を出して笑いながら「それは残念でしたな」と云う。

迷亭はとぼけた顔をして「君のような親切な夫を持った妻君は実に仕合せだな」とひとり言のようにいう。障子の蔭でエヘンと云う細君の咳払いが聞える。

吾輩はおとなしく三人の話しを順番に聞いていたがおかしくも悲しくもなかった。人間というものは時間を潰すために強いて口を運動させて、おかしくもない事を笑ったり、面白くもない事を嬉しがったりするほかに能もない者だと思った。吾輩の主人の我儘で偏狭な事は前から承知していたが、平常は言葉数を使わないので何だか了解しかねる点があるように思われていた。その了解しかねる点に少しは恐しいと云う感じもあつたが、今の話を聞いてから急に軽蔑したくなった。かれはなぜ兩人の話しを沈黙して聞いていられないのだろう。負けぬ気になって愚にもつかぬ駄弁を弄すれば何の所得があるだろう。エピクテタスにそんな事をしると書いてあるのか知らん。要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は糸瓜のごとく風に吹かれて超然と澄し切っているようなものの、その実はやはり娑婆気もあ

よくけもある。競争の念、勝とう勝とうの心は彼等が日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一歩進めば彼等が平常罵倒している俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りである。ただその言語動作が普通の半可通のごとく、文切り形の厭味を帯びてないのはいささかの取り得でもあろう。

こう考えると急に三人の談話が面白くなくなったので、三毛子の様子でも見て来ようかと二絃琴の御師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾りはすでに取り払われて正月も早や十日となったが、うららかな春日は一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度に照らして、十坪に足らぬ庭の面も元日の曙光を受けた時より鮮かな活気を呈している。椽側に座蒲団が一つあって人影も見えず、障子も立て切っているのは御師匠さんは湯にでも行ったのか知らん。御師匠さんは留守でも構わんが、三毛子は少しは宜い方か、それが気掛りである。ひっそりして人の気合もしないから、泥足のまま椽側へ上って座蒲団の真中へ寝転んで見るといい心持ちだ。ついうとうととして、三毛子の事も忘れてうたた寝をしていると、急に障子のうちで人声がする。

「御苦労だった。出来たかえ」御師匠さんはやはり留守ではなかったのだ。

「はい遅くなりまして、仏師屋へ参りましたらちょうど出来上がったところだと申しまして」「どれお見せなさい。ああ奇麗に出来た、これで三毛も浮かばれましょう。金は剥げる事はあるまいね」「ええ念を押しましたら上等を使ったからこれなら人間の位牌よりも持つと申しておりました。……それから猫誉信女の誉の字は崩した方が恰好がいいから少し劃を易えたと申しました」「どれどれ早速御仏壇へ上げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子が変だと蒲団の上へ立ち上る。チーン南無猫誉信女、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と御師匠さんの声がする。

「御前も回向をしておやりなさい」

チーン南無猫誉信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と今度は下女の声がする。吾輩は急に動悸がして来た。座蒲団の上に立ったまま、木彫の猫のように眼も動かさない。

「ほんとに^{ざんねん}残念な^{こと}事を^{いた}致しましたね。^{はじめ}始めは^{かぜ}ちよいと^ひ風邪を^ひ引いたんで^ございませうがねえ」^{あまき}「甘木さんが^{くすり}薬でも^{くだ}下さると、^しよかったかも^し知れないよ」^{いったい}「一体あの^{わる}甘木さんが^{わる}悪う^ございますよ、^{みけ}あんまり^{ばか}三毛を^す馬鹿にし^す過ぎませ^あね」^{ひとさま}「そう^{こと}人様の^{わる}事を^い悪く^い云うもの^はではない。^{じゅみょう}これも^だ寿命^だだから」

^{みけ}三毛子も^{せんせい}甘木先生に^{しんさつ}診察して^{もら}貰ったものと^み見える。

「つまるところ^{おもてどお}表^{きょうし}通りの^の教師の^のうちの^の野良猫が^{むやみ}無暗に^{さそ}誘い^だ出した^{おも}からだと、^{おも}わたしは^{おも}思うよ」^{ちきしょう}「ええあの^{ちきしょう}畜生が^{ちきしょう}三毛のか^{ちきしょう}たきで^ございますよ」

^{すこ}少し^{べんかい}弁解した^がかったが、^{がまん}ここが^{がまん}我慢の^しどころと^{つば}唾を^の呑んで^き聞いている。^{はな}話しは^{とぎ}しばし^{とぎ}途切れる。

「世の中は^よ自由^{なか}にならん^{じゆう}者^{もの}でのう。^{きりょう}三毛の^{はやじに}ような^{はやじに}器量^{はやじに}よしは^{ぶきりょう}早死^{ぶきりょう}をするし。^{ぶきりょう}不器量^{ぶきりょう}な^{ぶきりょう}野良猫^{ぶきりょう}は^{たっしゃ}達者^{たっしゃ}で^{たっしゃ}いた^{たっしゃ}ずら^{たっしゃ}をして^{たっしゃ}いるし……」^{とお}「その^{とお}通り^{とお}で^{とお}ござ^{とお}いますよ。^{かわい}三毛の^{かわい}ような^{かわい}可愛^{ねこ}らしい^{ねこ}猫^{ねこ}は^{かね}鐘^{たいこ}と^{さか}太鼓^{さか}で^{さか}探^{さか}して^{さか}ある^{ふたり}いた^{ふたり}って、^{ふたり}二人^{ふたり}とは^{ふたり}お^{ふたり}り^{ふたり}ませ^{ふたり}ん^{ふたり}から^{ふたり}ね」

^{にひき}二匹^{かわ}と^ふ云う^ふ代^ふりに^ふ二^ふたり^ふと^ふい^ふった。^{げじよ}下女^{かんが}の^{かんが}考^{かんが}え^{かんが}では^{にんげん}猫^{にんげん}と^{にんげん}人間^{にんげん}とは^{どうしゅぞく}同種^{どうしゅぞく}族^{どうしゅぞく}もの^{どうしゅぞく}と思^{どうしゅぞく}っている^{どうしゅぞく}ら^{どうしゅぞく}しい。^{かお}そう^{われらねこぞく}云^{われらねこぞく}えば^{われらねこぞく}この^{われらねこぞく}下女^{われらねこぞく}の^{われらねこぞく}顔^{われらねこぞく}は^{われらねこぞく}吾^{われらねこぞく}等^{われらねこぞく}猫^{われらねこぞく}属^{われらねこぞく}とは^{われらねこぞく}な^{われらねこぞく}は^{われらねこぞく}だ^{われらねこぞく}類^{われらねこぞく}似^{われらねこぞく}して^{われらねこぞく}いる。

「^{でき}出来^{でき}るもの^{でき}なら^{でき}三毛^{でき}の^{でき}代^{でき}りに……」^{ところ}「あの^{ところ}教師^{ところ}の^{ところ}所^{ところ}の^{ところ}野良^{ところ}が^{ところ}死^{ところ}ぬと^{ところ}御^{ところ}詔^{ところ}え^{ところ}通^{ところ}りに^{ところ}参^{ところ}った^{ところ}んで^{ところ}ご^{ところ}ざ^{ところ}い^{ところ}ませ^{ところ}う^{ところ}が^{ところ}ねえ」

御詔え通りに^{こま}な^{こま}って^{こま}は、^{こま}ちと^{こま}困^{こま}る。^{けいけん}死^{けいけん}ぬと^{こと}云^{こと}う^{こと}事^{こと}は^{こと}ど^{こと}んな^{こと}もの^{こと}か、^{こと}まだ^{こと}経^{こと}験^{こと}した^{こと}事^{こと}が^{こと}ない^{こと}から^{こと}好^{こと}き^{こと}とも^{こと}嫌^{こと}い^{こと}とも^{こと}云^{こと}え^{こと}ない^{こと}が、^{せんじつ}先^{せんじつ}日^{せんじつ}あ^{せんじつ}ま^{せんじつ}り^{せんじつ}寒^{せんじつ}い^{せんじつ}ので^{せんじつ}火^{せんじつ}消^{せんじつ}壺^{せんじつ}の中^{せんじつ}へ^{せんじつ}も^{せんじつ}ぐ^{せんじつ}り^{せんじつ}込^{せんじつ}んで^{せんじつ}いた^{せんじつ}ら、^こ下女^こが^こ吾^こ輩^こが^こいる^このも^こ知^こら^こんで^こ上^こから^こ蓋^こを^こした^こ事^こが^こあ^こった。^{とき}その^{とき}時^{とき}の^{とき}苦^{とき}し^{とき}さ^{とき}は^{とき}考^{とき}えて^{とき}も^{とき}恐^{とき}しく^{とき}な^{とき}る^{とき}ほ^{とき}ど^{とき}であ^{とき}った。^{しろくん}白^{しろくん}君^{しろくん}の^{せつめい}説^{せつめい}明^{せつめい}によ^{せつめい}ると^{せつめい}あ^{せつめい}の^{せつめい}苦^{せつめい}しみ^{せつめい}が^{せつめい}今^{せつめい}少^{せつめい}し^{せつめい}続^{せつめい}くと^{せつめい}死^{せつめい}ぬ^{せつめい}の^{せつめい}で^{せつめい}あ^{せつめい}る^{せつめい}そ^{せつめい}う^{せつめい}だ。^{みがわ}三毛^{みがわ}子^{みがわ}の^{みがわ}身^{みがわ}代^{みがわ}り^{みがわ}に^{みがわ}なる^{みがわ}の^{みがわ}なら^{みがわ}苦^{みがわ}情^{みがわ}も^{みがわ}ない^{みがわ}が、^{くじょう}あ^{くじょう}の^{くじょう}苦^{くじょう}しみ^{くじょう}を^{くじょう}受^{くじょう}け^{くじょう}な^{くじょう}く^{くじょう}て^{くじょう}は^{くじょう}死^{くじょう}ぬ^{くじょう}事^{くじょう}が^{くじょう}出^{くじょう}来^{くじょう}ない^{くじょう}の^{くじょう}なら、^{だれ}誰^{だれ}の^{だれ}た^{だれ}め^{だれ}で^{だれ}も^{だれ}死^{だれ}に^{だれ}た^{だれ}く^{だれ}は^{だれ}ない。

「^{ねこ}しかし^{ねこ}猫^{ねこ}でも^{ぼう}坊^{ぼう}さん^{おきょう}の^よ御^よ経^よを^よ読^よんで^よも^よら^よつ^よたり、^{かみみょう}戒^{かみみょう}名^{かみみょう}を^{かみみょう}こ^{かみみょう}し^{かみみょう}ら^{かみみょう}え^{かみみょう}て^{かみみょう}も^{かみみょう}ら^{かみみょう}つ^{かみみょう}た^{かみみょう}の^{かみみょう}だ^{かみみょう}か^{かみみょう}ら^{かみみょう}こ^{かみみょう}ころ^{かみみょう}の^{かみみょう}こ^{かみみょう}心^{かみみょう}残^{かみみょう}り^{かみみょう}は^{かみみょう}あ^{かみみょう}る^{かみみょう}まい」^ま「そ^まう^まで^まご^まざ^まい^まませ^まう^まとも、^ま全^まく^ま果^ま報^ま者^まで^まご^まざ^まい^まませ^まう^まよ。^{よく}た^{よく}だ^{よく}慾^{よく}を^{よく}云^{よく}う

とあの坊さんの御経があまり軽少けいしょうだったようでございますね」「少し短か過ぎたようだったから、大変御早たいへんおはようございますねと御尋ねおたずをしたら、月桂寺さんは、ええ利目のあるところをちよいとやっておきました、なに猫だからあのくらいで充分浄土じゅうぶんじょうどへ行かれますとおっしゃったよ」「あらまあ……しかしあの野良のらなんかは……」

わがはい 名まえ ことわ げじょ よ しっけい やつ
吾輩は名前はないとしばしば断ことわっておくのに、この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくらありがたい御経だつて浮かばれる事はございませんよ」

吾輩はその後野良が何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩はこの際限なき談話を途中で聞き棄すてて、布団をすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八万八千八百八十本の毛髪を一度にたてて身震みぶるいをした。その後二絃琴の御師匠さんの近所へは寄りついた事がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽少な御回向を受けているだろう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が慵なうく感ぜらるる。主人に劣らぬほどの無性猫となった。主人が書斎しょさいにのみ閉じ籠こもっているのを人が失恋だ失恋だと評ひょうするのも無理はないと思おもうようになった。

鼠はまだ取った事がないので、一時は御三いつとき おさんから放逐論ほうちくろんさえ呈出ていしゅつされた事もあったが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云う事を知っているものだから吾輩はやはりのらくらしてこの家が起臥きふしている。この点については深く主人の恩を感謝すると同時にその活眼かつがんに対して敬服けいふくの意を表いするに躊躇ちゅうちよしないつもりである。御三が吾輩を知らずして虐待ぎゃくたいをするのはべつはらたべつ はら たいまひだりじんごろういま ひだりじんごろうできしょうぞうしょうぞうろうもんろうもんはしらはしらきぎきぎにつぼんにつぼんタンランこのが好んで吾輩の似顔をカンヴァスの上に描くようになったら、彼等鈍瞎漢かれらどんかつかんは始めて自己の不明じこを恥はずるであろう。